

## 学生相談室におけるエビデンスに基づいた デートDV対応策についての研究

越智, 啓太 / OCHI, Keita

---

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

5

(発行年 / Year)

2016-06

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 5 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380949

研究課題名(和文) 学生相談室におけるエビデンスに基づいたデートDV対応策についての研究

研究課題名(英文) Coping method on dating violence/harassment between university students couples

研究代表者

越智 啓太(OCHI, keita)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：40338843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主に大学生カップルにおける、デートバイオレンス、デートハラスメントを対象にしてその予測と対処策についての研究を行った。まず、学生相談所などの機関の調査を行い、現在の大学生においてデートバイオレンス、デートハラスメントが大きな問題となっていることを明らかにした。つぎに、これらの行動を測定するための尺度を構成した。三番目にこれらの行動を引き起こす加害者の属性、性格、交際の特徴について明らかにし、これらのデータからデートバイオレンス・ハラスメントを予測するための式を構成した。最後にそれぞれのデートバイオレンス・ハラスメント行為における適切な対処方略を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： In this study, prediction and coping method on dating violence or dating harassment between mainly university students couples were studied. First, dating violence and dating harassment were found to be big issue among university students these days thorough investigation on organizations such as Students counseling center. Next, psychological scale to measure such behaviors was made. Third, attributes, personality or features in relationship that elicit those behaviors were revealed, and with those findings, formula to predict dating violence and harassment was made. Finally, appropriate coping strategy for each behavior on dating violence and harassment were shown in this article.

研究分野：犯罪心理学

キーワード：デートバイオレンス デートハラスメント 恋愛行動 ドメスティックバイオレンス 虐待 ストーカー  
ング 学生相談 大学生

## 1. 研究開始当初の背景

近年、交際相手からの様々な強制行為に悩む大学生が増えている。たたく、首を絞める、殴るまねをして脅すなどの身体的暴力のみでなく、繰り返し批判したり、非難する、侮辱的な言動をするなどの言語的暴力、借りた金を返さない、アルバイトをやめさせるなどの経済的暴力、過度の監視や友人関係への介入、服装や髪型の強制などの精神的暴力、性的行為の強制や裸の写真をとるなどの性的暴力などの多様な行為である。これらの行為は、広い意味でのデート DV (ドメスティック・バイオレンス) といえるであろう。このような行為は被害者にうつや不安などの精神症状や不眠や吐き気などの身体症状を引き起こす。なによりも本来、楽しいはずの恋愛関係を苦痛に満ちたものにしてしまう。そのため、この種の強制行為を、防いでいく必要がある。

しかしながら、この種の暴力に対して、どのような方法で対処していけば良いのかについては、実証的な方法論で研究したものはわずかにしか存在しない (Jackson, 1999; Harned, 2002)。実際、デート DV に関する被害者を対象にした書籍の中では、デート DV の定義や事例について書かれていることは多いが、どのように対処していくべきかについては、相談機関に相談するよといったアドバイスしか書かれていない場合が多い。また、相談機関の相談員などの専門家対象の書籍や論文においても、デート DV についての法的な問題解決策などについては詳しく書かれていることが多いが、心理学的にどのような介入をすればよいのかについては、明確に書かれていないことが多い。

ただし、デート DV についての有効な対処策を構築するといってもさまざまな問題点がある。まず、第1に、加害者にはさまざまなタイプが存在しているということである。そのため、加害者がどのようなパターンのデート DV 行動を行うのかによって、有効な対応策も異なっていると思われる。

そのため、デート DV を相談機関で扱う場合には、加害者のパターンを識別し、それに応じた対応策をとっていく必要がある。しかし、現在、このような方法論をとっている相談機関はほとんどなく、デート DV への対応は相談員個人個人の経験に基づくものとなっている。もちろん、対応策やその効果についてのエビデンスも蓄積されていない。

## 2. 研究の目的

以上の問題点を受けて、本研究では(1)デート DV の被害者・加害者に対する調査から、デート DV に対する有効な対応策について明らかにする。(2)デート DV の具体的な事例とその対応策の成功事例、失敗事例を収集して、加害者タイプごとに整理し、効果的な対応策について明らかにする。(3)加害者タイプごとの対応策とそれぞれの対応策をとった

場合のリスクについてのガイドラインを作成する、(4)おもに相談機関を対象としたデート DV 対応策のガイドラインを作成する。

## 3. 研究の方法

本研究の対象はデート DV であるが、これを調査するためには現在、交際中のカップルのデータが大量になる。そこで、大学生を対象とした質問紙 (調査票) 配布とウェブ調査を併用してデータ収集を行い、その結果を分析した。本研究においては男女 600 人規模のウェブ調査を 3 回行った。

## 4. 研究成果

### (1) 大学相談室等への聞き取り調査

本研究の対象は、おもに大学生におけるデート DV であるため、大学の学生相談室や各自治体の相談室においてデート DV が実際にどの程度相談されているのか、また、その対応策がどのようになっているのかについての聞き取り調査を行った。その結果、次のようなことが明らかになった。

大学生の男女交際に関する悩みにはさまざまなものがあるが、その中でデート DV に関する相談はかなり多い。しかも主訴の背後にデート DV が含まれているケースはさらに多く深刻な問題となっている。

デート DV というと身体的な暴力を想像しがちであるが、現実には支配監視系のハラスメントやストーキング、つきまといなどのいわば、デートハラスメントが問題の大半を占めており、暴力的なものはむしろ少数である。

各相談機関ともデート DV やハラスメントに対する相談には熱心に取り組んでおり、各種の広報パンフレットを作成している場合が多い。しかしながら、これらの事例についての対応は、基本的には各カウンセラーに任せられており、カンファレンスなどで問題共有が行われる場合もあるが、実際にはカウンセラーの個人的な力量に任せられている。

カウンセラーの使用する技法も、クライアント中心療法的な傾聴中心のテクニックから、きわめて指示的な方法まで多様であり、一貫性がない。しかも、エビデンス (はそもそも存在しないため) に基づいているわけではない。

各相談機関とも、デート DV の対応策については明確な指針やエビデンスの必要性を切実に感じている。

### (2) デートバイオレンス・ハラスメントについての実証的な研究 (第1調査)

第1調査では、異性と交際経験のある大学生女子 600 名を使用してデートバイオレンスの実態について探索的な調査研究を行った。この研究の目的は、

信頼性と妥当性のあるデートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成

デートバイオレンス・ハラスメントと関連している加害者属性を明らかにする。

デートバイオレンス・ハラスメント加害者の被害者から見た性格特性について明らかにする（従来の研究は加害者の自己評定パーソナリティ特性とデートバイオレンス・ハラスメントの関連について分析されるものが多かったが、本研究においては、相談機関を訪れるのは基本的には被害者であることが多いことより、被害者から加害者の他者評定を用いた）

これらの研究の結果、まずデートバイオレンス・ハラスメントを測定する尺度が構成できた。また、デートバイオレンス・ハラスメントの発生やそのパターンと関連しているさまざまな加害者、交際パターンが明らかになった。たとえば、加害者属性としては、その年齢、学歴、飲酒、喫煙、経済状況などであった。また、加害者のパーソナリティ属性としては、大きく3つのグループに分けられる属性群が、デートバイオレンス・ハラスメントと関連することが示された。それは、尊大傾向（相対的剥奪、女性蔑視、権威主義、未熟性）、対人関係不安（対人不安、シャイネス、対人恐怖、自己犠牲）、包括的自己愛（注目欲求、優越・有能感、自己主張性、注目感性、社交性）であった。つぎにこれらの3つの属性群とデートバイオレンス・ハラスメントの関連について、構造方程式モデリングを用いて分析したところ、対人不安や包括的自己愛は、尊大傾向を経由してすべてのタイプのバイオレンス・ハラスメントと関連していることが明らかになった。

### （3）デートバイオレンス・ハラスメントについての実証的な研究（第2調査の1）

第1調査によってデートバイオレンス・ハラスメントの特徴やそれを予測する変数が明らかになったが、これらは基本的には大学生女子を対象にするものであった。しかし、現実的には、相談室におけるデートバイオレンスの被害者は女性のみに限らない。現状では、各種相談機関に来談するものは確かに女性が多いが、男性の被害者は単に暗数になっているだけで、大量に存在しているという指摘も少なくない。そこで第2調査では、男性も対象にし、また、より広範囲な調査対象者を用いて第1研究の結果を追認することを目的とした。また、第1研究の問題点として、性的虐待についての項目を含めていなかったこと、測定下位尺度の項目数にばらつきがおおきかったことから、これらを統一した改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度を構成することを目的として現在、交際中の男女600名を対象とした調査研究を行った。研究の結果は以下ようになった。

まず、7領域×5項目からなる改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度が構成できた。

デートバイオレンス・ハラスメントの性差については、興味深いことに男性は女性よりもむしろデートバイオレンス・ハラスメント

の被害を受けているということが示された。

第1研究で明らかになったさまざまな属性や交際パターンとの関係の多くは追証された。

デートバイオレンス・ハラスメントを引き起こすプロセスについての構造方程式モデリングについても男女とも類似のパターンを示し、デートバイオレンス・ハラスメントの生起メカニズムは性差がない可能性が示唆された。

ただし、男性加害者の場合には女性蔑視傾向という特有な思考パターンが関連していることがあるがこれに対応する男性蔑視傾向は女性には存在しなかった。このような傾向は、社会分化的に構築されたものである可能性がある。

第2研究においては、被害経験のみでなく、自らの加害経験についても検討が行われた。その結果、興味深いことに被害経験評定値と加害経験評定値の分析は必ずしも整合性があるものではないことが示された。この原因は加害者が自らの加害行動を「加害」とであると認識していないことに原因があることが示唆された。

「友情」はデートバイオレンス・ハラスメントと関連しており、友情を減少させることがわかったが、「愛情」についてはこのような関連性が見られなかった。これは、デートバイオレンス・ハラスメントが行われているにもかかわらず、わかれたい、わかれたくないというカップルが少なくなく存在することを説明している可能性がある。

デートバイオレンス・ハラスメントの加害と被害には高い相関が見られた。これは、加害と被害がともに影響し合って増大している可能性を示唆するものであった。

### （4）デートバイオレンス・ハラスメントについての実証的な研究（第2調査の2）

デートバイオレンス・ハラスメントの研究では国内外の研究ともに加害者や被害者の属性やパーソナリティ要因とハラスメント行為の関連については検討されているが、交際パターンについては研究が限られている。それは、そもそも交際パターンや交際時の愛情の個人差を測定する尺度が限られていたからであると思われる。相談活動においては、加害者、被害者の属性やパーソナリティ要因よりもむしろ、「どのような交際をしているのか」、「相手に対してどのような思いでいるのか」が重要になると思われる。そこで、本研究では、交際パターンの個人差を測定する尺度を構成し、その尺度とデートバイオレンス・ハラスメントの関連について検討した。構成したのは以下の12個の尺度である。反復想起傾向、侵入想起傾向、ひとめぼれ傾向、再確認傾向、拒絶敏感性、監視欲求、後悔因子、追求因子、恋愛マキシマイザー、恋愛妄想（空想）傾向、失恋反芻傾向、社会的剥奪傾向である。いずれの尺度も高い信頼性をも

つ尺度として構成できた。また、これらの尺度のうち、反復想起傾向をのぞくすべての尺度でデートバイオレンス・ハラスメント加害・被害との関連が認められた。これは、恋愛パターンが密接にハラスメント行為の生起と関連していることを示している。

(5) デートバイオレンス・ハラスメント対処策とその効果についての実証的な研究(第3調査)

第3調査では、デートバイオレンス・ハラスメントに遭遇した場合の対処行動とその効果について検討した。身体的暴力、間接的暴力、言語的暴力、経済的暴力、言語的暴力、性的暴力、つきまといなどがあった場合、実際にどのような対処策を行ったか、そしてその効果はどのようなものであったのかについて現在、異性と交際中の男女600名を対象にウェブ調査を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

「そのような行為はやめてくれ」などと直接的に相手に要求することは、バイオレンス・ハラスメントを減少させるために思いの外効果があることがわかった。これは、第1の対処策としては有効であることが示された。ただし、これが事態を悪化させるケースが少なくなく存在することがわかった。直接的な要求が効果を上げるかどうかは、加害者の尊大さ傾向(相対的剥奪、女性蔑視、権威主義、未熟性)と関連している可能性があり、このような傾向が大きい場合にはこの対処方略は逆効果である可能性がある。

反撃や無視などの対処方略はすべてのデートバイオレンス・ハラスメント行為に対して悪影響を及ぼすことが多いことが示された。つまり、自らの被害行為に対して反撃を行えば、事態は多くの場合、悪化する。ただし、実際にはこの方略がとられていることは少なくない。第2調査においては、被害と被害が高い相関を示していることが示されたが、これはまさに互いの反撃によって事態が悪化するループに突入したということの意味している。これより、相談活動においては、反撃行為が行われている場合にはこれをやめさせるための介入が効果的であることが示された。また、反撃などの対処方法を取りやすい加害者、被害者のパーソナリティ要因に関しても、やはり、尊大さ傾向(相対的剥奪、女性蔑視、権威主義、未熟性)が関係していることがわかった。

ストーキング犯罪などにおいては加害者-被害者の「対決」つまり、直接会って、話し合う機会を設けることはむしろ危険性を高めるものであることが近年指摘されているが、本研究で扱っているようなデートバイオレンス・ハラスメント行為においてはこのような「話し合い」は事態解決において有効な手段のひとつであることが示された。これは相談機関においては事態の重要性を見極めて、カップルをともに対象とするカウンセ

リングの機会を設けることが有効な対処策であることを示している。

(6) デートバイオレンス・ハラスメント相談機関におけるエビデンスに基づいた相談手法の提案とガイドラインの作成、評価。

ここまでの研究結果を踏まえ、相談機関がデートバイオレンスやハラスメントの相談を受けた場合の、対応策プラン、ガイドラインを作成した。このガイドラインはおもに次のような流れのものである。

来談者(多くの場合、被害者)より加害者の属性、パーソナリティの評価、デートバイオレンス・ハラスメントの被害程度の査定を行う。

とくに加害者の尊大さ傾向を検討し、それがそれほど高くなく、デートバイオレンス・ハラスメントの程度が生命の危機を招くほど深刻でない場合には、第1介入方法として被害者から加害者へ直接的に被害をやめるように話してみる。

の介入策が効果がなかった場合、あるいはデートバイオレンス・ハラスメントの程度が中程度の場合、加害者の尊大さ傾向がそれほど高くない場合には、第2介入方法として、カップルカウンセリングを導入する。

デートバイオレンス・ハラスメントの程度が大きい場合、尊大さ傾向が大きい場合にはリスクが大きいため、の対処策には慎重になることが必要である。この場合には警察や行政機関などとの連携のもとにストーカー規制法に基づく対処策などを実施することが望ましい。

本ガイドラインや本研究で作成されたさまざまな診断尺度は、相談機関などで事態の深刻さや対処策を検討する場合、有効なツールであるといえるだろう。ただし、最終的に尊大さ傾向の大きいケースについては十分な対処策を検討することができなかった。この点については引き続き検討することが必要であろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

越智啓太、甲斐恵利奈、喜入暁 2016 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(3) - 恋愛行動パターンとDVの関連 - 法政大学文学部紀要, 73,(印刷中) 査読なし

越智啓太、喜入暁、甲斐恵利奈、長沼里美 2016 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(2) - 加害に焦点を当てた分析 - 法政大学文学部紀要, 72, 161-171. 査読なし

<http://hdl.handle.net/10114/12097>

越智啓太、喜入暁、甲斐恵利奈、佐山七生、長沼里美 2015 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(1) - 被害に焦点を当てた分析 - 法政大学文学



部紀要, 71, 135-147. 査読なし

<http://hdl.handle.net/10114/11616>

越智啓太、喜入暁、甲斐恵利奈、長沼里美  
2015 女性蔑視的態度がデートハラスメント  
に及ぼす効果 法政大学文学部紀要, 70,  
101-110. 査読なし

<http://hdl.handle.net/10114/10372>

越智啓太、長沼里美、甲斐恵利奈 2014 デ  
ートバイオレンス・ハラスメント測定尺度の  
作成 法政大学文学部紀要, 69, 63-74. 査読な  
し <http://hdl.handle.net/10114/9799>

〔学会発表〕(計 14 件)

越智啓太・佐山七生・大高美奈(2015.10.31)  
カップルにおける「自分たちが一番幸せバイ  
アス」の特徴 日本社会心理学会第 56 回大  
会発表(東京都杉並区・東京女子大学)

大高美奈・越智啓太(2015.10.31) レイブ神  
話尺度 RMAS と AMMSA の比較 日本社会  
心理学会第 56 回大会発表(東京都杉並区・東  
京女子大学)

喜入暁・越智啓太(2015.10.31) 包括的なデ  
ートバイオレンス・ハラスメント尺度の開発  
日本社会心理学会第 56 回大会発表(東京都杉  
並区・東京女子大学)

佐山七生・越智啓太(2015.10.31) 恋愛関係  
の崩壊過程を測定する尺度の作成 日本社会  
心理学会第 56 回大会発表(東京都杉並区・  
東京女子大学)

越智啓太・喜入暁・甲斐恵利奈・長沼里美  
(2015.9.22) デートバイオレンス・ハラスメン  
ト被害とその特徴 日本心理学会第 79 回大  
会発表(愛知県名古屋市・名古屋大学)

長沼里美・越智啓太 (2015.9.22) デートバ  
イオレンス・ハラスメント行為形態と関連す  
る被害者および加害者特性の分析 日本心  
理学会第 79 回大会発表(愛知県名古屋市・  
名古屋大学)

越智啓太・長沼里美・喜入暁・久保田はる  
美・亀川勇太・甲斐恵利奈(2014.9.22) 女性蔑  
視的な行動とデートバイオレンス・ハラスメ  
ントの関連 日本心理学会第 78 回大会発表  
(京都府京都市・同志社大学)

長沼里美・越智啓太 (2014.9.11) デート DV  
の被害形態の分類と加害者/被害者の特性  
の関連 日本心理学会第 78 回大会発表(京  
都府京都市・同志社大学)

越智啓太ほか(2014.11.2) 大学生のつきま  
とい型デートハラスメントと関連する諸要  
因 日本社会心理学会第 55 回大会(北海道  
札幌市・北海道大学)

甲斐恵利奈・越智啓太ほか(2014.11.2)  
デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作  
成 日本社会心理学会第 55 回大会発表(北  
海道札幌市・北海道大学)

喜入暁・久保田はる美・越智啓太(2014.11.2)  
恋愛における後悔・追求者尺度と自尊心の関  
連 日本社会心理学会第 55 回大会発表(北  
海道札幌市・北海道大学)

ぎよ

〔図書〕(計 6 件)

越智啓太 2015 恋愛の科学 実務教育出  
版, 269

越智啓太 2015 ワードマップ 犯罪捜査  
の心理学 新曜社(2015/12/03), 205

## 6. 研究組織

研究代表者

越智啓太 (OCHI keita)

法政大学・文学部・教授

研究者番号: 4 0 3 3 8 8 4 3